

ブームとしての不思議現象

小 城 英 子
坂 田 浩 之
川 上 正 浩

Paranormal Phenomena as a Boom

The purpose of this study is to explore the paranormal phenomena as a boom, using the magazine database "Oya-Soichi Bunko" and counting news items from January of 1998 to March of 2007. Before 1995, the main stream of the paranormal phenomena was "psychic phenomena" and/or "supernatural power". This study shows that after 1995, when the poison gas attack in the Tokyo subways was carried out by Aum Shinrikyo (a Japanese Buddhist religious group founded by Shoko Asahara), the boom of the paranormal phenomena was switched over to "fortune telling and augury" and / or "spirituality".

序

心霊現象や占い、UFO、超能力など、現代の科学知識では説明がつかない不思議な現象を総括して“不思議現象”と呼ぶ（菊池、1995）。具体的には、第1に雪男や山の半獣人、ツチノコ、怪魚、古代の生き残り怪獣、神秘の場所などの“探しもの”，第2にUFOやバミュータ・トライアングル、心霊写真、心霊現象、幽霊の出る家、ミステリー・サークル、ピラミッド、ヨーロッパの怪談などの“不思議現象もの”，第3にスプーン曲げ、占い、霊視、予言者、気功、心霊手術などの“超能力もの”の3つのジャンルがある（木村、1996）。

日本における不思議現象ブームには、古くは1910年の御船千鶴子による千里眼事件（根元、1997；長山、2005）や長尾郁子による透視実験（那由他、2005）などがあるが、1940年代後半のアメリカにおけるUFO目撃談に始まってさまざまに拡大し、ユリ・ゲラーのスプーン曲げなどによって、1973年に突出したブームが沸き起こった（木村、1996；吉田、2004）。

ブーム（流行）¹⁾とは、“時間的、空間的な集中によって起こる社会現象”と定義され（電通マーケティング局、1982、ただし中島、1998）、その時代の世相や風潮を反映している。朝鮮戦争、皇太子成婚、東京オリンピック、石油ショックなどの社会的な現象と、ブームとしての流行歌や流行色、服装などとの関連を分析した研究もある（川本、1981；上野、1994）。

不思議現象におけるブームも社会情勢との関連で分析することが可能であろう。本研究では、雑誌記事を世相の指標として不思議現象ブームの変遷を分析する。

問題の背景

木原 (2006) は、アメリカで圧倒的に多い UFO 神話について、世界情勢や社会背景などとの関連から分析を試みている。UFO とは、現在ではエイリアン (異星人) の乗り物と同義に扱われているが、もともとは、“Unidentified Flying Object” の略で、未確認飛行物体を指す用語であった。すなわち、雲なのか、鳥なのか、敵国の偵察機なのか、正体が不明の飛行物体の総称で、必ずしも宇宙人の乗り物に限定されていたわけではなかった。UFO 神話は、1947 年、アメリカ合衆国に住む実業家のケネス・アーンロッドが軽飛行機を操縦中に“ブーメランのような形”の 9 つの物体の連なりを目撃したことに端を発している²⁾。木原 (2006) は以後、“空飛ぶ円盤 (Flying Saucer)” の目撃談が相次ぐ 1973 年までを“空飛ぶ円盤神話の時代”、空飛ぶ円盤の目撃談が消え、アブダクション (宇宙人による誘拐) やミューティレーション (何者かによる家畜の大量殺戮)、UFO 墜落事件へと移行した 1973 年～1995 年を“エイリアン神話の時代”、1995 年以降を“ポスト UFO 神話の時代”としている。以降では、この区分に従って、まずそれぞれの時代の不思議現象を概観する。

“空飛ぶ円盤の時代” (1947～1973 年)

“空飛ぶ円盤神話の時代”には、宇宙人は、戦争や病気など、現代の地球が抱える問題の克服を手助けするために到来した、地球人が目指すべき理想像として登場する。“神”という超越的な存在を失った現代においては、科学が権威の対象となり、宇宙人や UFO が近代科学の象徴として位置づけられている (木原, 2006)。1970 年代には、UFO を宗教的権威と位置づける UFO カルトも誕生した (Balch & Taylor, 1997)。明治期に登場した心霊ブーム (根元, 1997; 長山, 2005; 那由他, 2005) も、心霊現象は宇宙

人によるものだという宗旨変えのもと、UFO ブームへと転換を見せている（小池，2004）。

“エイリアン神話の時代”（1973年～1995年）

ベトナム戦争の敗北、ウォーター・ゲート事件など、政府や企業に対する不信が急速に高まり、世界のリーダーというアメリカのアイデンティティが揺らぎ始めた1973年以降、人々の関心は天空の理想よりも地上の悪へと向けられ、UFO神話は科学不信と精神世界ブームと一体化する（木原，2006）。そして家畜から血液や特定の臓器のみが奪われるといったキャトル・ミュティレーション³⁾や、宇宙人に誘拐されて人体改造を受けたり、人体実験に使われたりするといったアブダクション（宇宙人による誘拐）などの“エイリアン神話の時代”に突入する。背景には、バイオテクノロジー、クローン技術、遺伝子組み換え、体外受精といった科学技術の発展に伴う社会的不安が指摘されている（木原，2006）。

“空飛ぶ円盤の時代”から“エイリアン神話の時代”への転換と期を一にして、日本でも1973年に刊行された、つのだじろうの漫画を発端として、映画『エクソシスト』の公開、写真集『恐怖の心霊写真集』の刊行などが相次いだことにより、心霊を中心とした不思議現象ブームが沸き起こる（吉田，2004）。翌1974年にはユリ・ゲラーや清田益章によるスプーン曲げなどの超能力が登場し（布施，2005）、テレビでも積極的に取り上げられた（木村，1996）。この時期には、1984年の水産庁調査船および1986年の日航機長によるUFO目撃があったり（布施，2005）、1986年に登場した宜保愛子による霊視が脚光を浴びたり（栗原，2005）、1928年に登場した血液型性格判断（詫摩・佐藤，1994；溝口，1997）が最盛期を迎える（上瀬，1994）など、さまざまな不思議現象がブームになる。

“ポスト UFO 神話の時代” (1995 年～)

“空飛ぶ円盤”，“エイリアン神話”へと推移してきた UFO 神話は、1995 年に臨界を迎えて終焉する。1995 年にはエイリアンの死体を解剖する場面を映したとされる“宇宙人解剖フィルム”が公開されたが、実証の術のない、言説の中でこそ存在し得た宇宙人が具体的な映像として表現され、その死滅の場面を描かれたことによって、宇宙人神話そのものも消滅させられることとなった。また、1995 年はオウム真理教による地下鉄サリン事件やオクラホマ・シティの連邦ビル爆破事件、1997 年にはカルト的 UFO 教団ヘブンズ・ゲートの集団自殺事件⁴⁾が発生し、虚構と現実が逆転した(木原, 2006)。すなわち、“空飛ぶ円盤の時代”には、写真や家畜の死体といった現実に基づいて UFO 神話の虚構が作られていたのに対し、“エイリアン神話の時代”には現実についての言説が徐々に現実そのものに置き換わり、虚構に基づいた行動が現実社会に影響を及ぼすようになった。その一方で、コンピュータなどの情報工学の発達によって高度な解析が可能になり、1969 年のアポロの月面着陸が国家的規模で行われた捏造であったと主張するテレビ番組も登場し、現実が虚構になるという逆転現象も生じている(木原, 2006)。パソコンや携帯電話等の電子メディアの普及が加速化したのが 1995 年であること(中村, 2001)も、無関係ではないと考えられる。

科学が人類の目指すべき理想として設定された“空飛ぶ円盤の時代”，科学の急速な発展と科学不信に基づいて宇宙人や UFO が人類や地球の脅威となった“エイリアン神話の時代”を経て，“ポスト UFO 神話の時代”においては、社会のハイパー化・バーチャル化に伴って、宇宙人や UFO はもはや外界からの侵略者ではなく、政治的陰謀と絡んだテロリズム、環境ホルモン、Y2K 問題といった形に姿を変えて社会システムの中に入り込み、予測のできない脅威をもたらしている(木原, 1996)。

不思議現象ブームの現在

オウム・ショック

1995年、オウム真理教教団による地下鉄サリン事件を発端として、破壊的カルトに注目が集まり、心霊的・宗教的な活動に対するパッシングが激化した。以降、90年代後半は、社会全体が第2のオウム真理教教団を警戒し、悪徳商法や集団自殺など、破壊的カルトが引き起こす事件に対して厳しい反応を示していた(堀江, 2007)。主に心理学者を中心として、マインド・コントロールや不思議現象信奉の研究が盛んになったのも同時期である(たとえば、西田, 1995; 菊池・谷口・宮元, 1995; 西田, 1998; 菊池, 1998; 坂田・岩永, 1998; 岩永・坂田, 1998; 中村, 1995; 水野・辻, 1996; 遠藤, 2002など)。その一方で、破壊的カルトにつながりやすい超能力や霊視などを扱ったメディアも一斉に自粛された(栗原, 2005)。

オウム事件は、以後の不思議現象ブームの4つの波に多大な影響を与えたと考えられる。第1に霊性を別の形に置き換えて存続させたスピリチュアリティの台頭、第2にエンターテインメント性の強調、第3に霊的なものを一切否定する科学信仰、第4に科学のコンテクストに乗せられた健康ブームである。

1. スピリチュアリティの台頭

日本人は、仏教やキリスト教などの特定宗教に帰依する割合は少ないために、宗教意識が希薄であると思われがちであるが、特定宗教の枠組みではない超越的な存在を信奉し、漠然とした霊的なものを信仰する傾向は強く、堀江(2007)の表現を借りるなら“無宗教の宗教性”に特徴がある。1995年のオウム事件後、2000年までは反カルト一色であったが、人々の霊に対する関心は強く、2000年以降は破壊的カルトや特定宗教との結びつきを希薄化させた形で再び霊信仰が取り上げられ、“カルトはパッシン

グ、オカルトはブーム”という風潮に転じた(堀江, 2006).

再登場した霊信仰の特徴は、“幽霊”や“靈感商法”などのネガティブなイメージを想起させる漢字表記の“霊”ではなく、カタカナ表記の“スピリチュアル/スピリチュアリティ”のキーワードを用いていること、折しも到来した“癒し”や“カウンセリング”のブームと呼応してポジティブなコンテクストに乗っていること、真実性は追究せず、実用性・娯楽性・安全性の条件をクリアしていることである(堀江, 2006). 中でも、注目されるのは、スピリチュアリティ概念への転換である。

スピリチュアリティとは、(1) 気づかれていなかったことへの気づきとそれによる成長や成熟のプロセスと関わる、(2) 個別の宗教的崇拝対象にこだわらず、見えないつながりを心身の全体で感じ取ることに価値を置く、(3) 宗教の核心部分にあたるが、組織宗教では形骸化したり、表現が抑制されたりする、(4) “神”や“聖なるもの”などの概念と異なり、個々人の内的生活や世俗生活のなかでも発見され、探求される、の4点の特徴を持つ(堀江, 2007). すなわち、仏教やキリスト教といった特定宗教の枠組みに束縛されず個を超えたものとのつながり、自己を高めることを推進している点で、日本人の“無宗教の宗教性”に対応していると考えられる。

現在、スピリチュアルのブームを牽引しているのは1995年に登場した江原啓之である(横田, 2006). 江原啓之は当初は、霊能者として宗教色を強く打ち出していたが、2001年以降、“スピリチュアル・カウンセラー”を名乗り、実際のカウンセリングに近い技法を用いて、クライアントに人生のアドバイスを行っている(堀江, 2007). 江原啓之を中心に据えた“オーラの泉”(テレビ朝日系列2005年4月～)は、ゲストのタレントの前世や守護霊について江原が語る内容になっており、高視聴率を獲得している(信田, 2006).

2. エンターテインメント性の強調

オウム事件以降、不思議現象は、真偽はあいまいなまま、物語として娛

楽的に提供される傾向が強くなった（堀江，2007）。たとえば、前述の“オーラの泉”は、守護霊を見ることができる能力を持つ江原啓之、江原の言葉、信憑性を持って伝達する三輪明宏の他に、ジャニーズタレントの国分太一を狂言回しとして投入している（信田，2006）。“オーラの泉”（2006年4月24日放送）の内容分析を行った小城・坂田・川上（印刷中）によれば、江原啓之の霊視を前面に出した番組構成でありながら、江原啓之と三輪明宏だけでは霊能一色になるところを、国分太一が一般人の代表として要所でユーモアを交えて茶化したり、笑いをとったりすることによって、親しみやすさを演出し、スピリチュアリティに対する抵抗感を薄めている。また、同じく小城ほかが内容分析を行った“ドスペ！ 世界超常現象審議会議スクープサミット2”（2006年4月22日放送）も、宇宙人やUMA（Unidentified Mysterious Animal=未確認動物）などを扱っているが、いずれの事例も番組内で真偽の断定は行われず、司会にはお笑いコンビの“さまぁ〜ず”を起用、番組進行の至るところで物真似やギャグを盛り込んでおり、バラエティの中でもお笑い番組としての要素が強い。

一方、受け手も、不思議現象に対して、盲目的に信奉するというより、演出も含めて娯楽的に享受する傾向が強い（小城・坂田・川上，2006）。小城ほか（印刷中）では、“オーラの泉”（2006年4月24日放送）およびドスペ！ 世界超常現象審議会議スクープサミット2”（2006年4月22日放送）を視聴した受け手の反応も分析しているが、娯楽的に提示された不思議現象を信奉する度合いは低く、逆に、稚拙な番組構成や非論理性を批判するところにおもしろさを見出している側面が示唆されている。不思議現象のテレビ番組が開始された1970年代ごろから、受け手の中にも“演出だと分かっている、番組が面白ければよい”、“一定の約束ごとの中で、テレビは作られている”など、番組の演出や細部、裏側への関心などの番組を深読みする“熟練性”の態度が生まれてきており、こうした現代的なテレビの見方をする受け手は、年々増加傾向にある（白石・井田，2003）。受け手の方も、テレビ番組には演出が不可欠で、特にバラエティ番組では捏造

にまで至っているケースがあることを認識した上で、不思議現象を娯楽的に享受していると考えられる。

エンターテイメント志向性の強くなった現代の受け手のニーズ（白石・井田，2003）に対応して，小城・坂田・川上（2007）は，不思議現象の中でも，スプーン曲げや透視などのショー向きの超能力は，2004年ごろからもてはやされるようになった手品ブームへと変遷したと推察している。トリックを前提とした手品であれば，捏造の誘いを受けることはなく，一定時間内に確実にクライマックスを計算できる上に，破壊的カルトとのつながりもないため，無難に提供できる（小城ほか，2007）。もともと，手品と同じトリックを用いて不思議現象が捏造されるか（木村，1996），または，かつては手品に対する関心がさほど高くなかったため，特にテレビで手品を披露する際には，意図的に心霊などと絡めて不思議現象として提示する演出が必要であった（村上，2001）。たとえば，Mr. マリックはもともと“マジック”と“トリック”を合わせた芸名で，手品であることを暗黙の前提として“超魔術”を演出していた。すなわち，多くの不思議現象は，実質的に手品のバリエーションであり，オウム事件によって心霊現象や超能力としての演出を自粛，本来の手品としての演出に立ち返ったと考えられる。

3. 科学信仰の台頭

オウム事件の余波は，心霊現象や超能力からスピリチュアリティやエンターテイメントへの関心の移行の一方で，社会全体の科学信仰も促進することとなった。すなわち，超能力や霊視といった説明不可能な現象に対する盲目的信奉は，破壊的カルトと直結するために全面的に否定され，代わりに，医学・化学・物理学・心理学といった学問分野を基盤として，科学的説明が可能な現象を積極的に肯定するという風潮が強くなったと考えられる。

社会文化的なピラーのシステムは，まず魔術の信奉から始まり，次に

文明の進化と共に体系化された宗教の信奉へと発展し、最後に宗教から脱却して科学の信奉へと移行する (Frazer, 1923) と指摘されているように、1970年代の日本では神仏や天皇といった宗教的権威が信奉の対象であったが、さらに文明の発達した現代では、科学が宗教に取って代わり、オウム事件を転機として科学信仰が加速したと考えることができる (小城・川上・坂田, 2006)。

しかし、盲目的な科学信仰の危険性も指摘されている。瀬戸 (2004) によれば、科学の発達は、一般人に対して科学への依存傾向を強め、自ら思考することを放棄させ、専門家への帰依を促進してきた。科学を全知全能のものとして信仰する心理的メカニズムは、宗教に対する信仰と共通していると考えられる。他にも、現代社会においては、科学が宗教の様相を呈してきているとする指摘は多い (池田, 1996 など)。不思議現象は、科学の対極にあるものとして位置づけられているが (菊池, 1995)、科学信仰もまた、“科学” というパラダイムを通じて、宇宙や世界、自然などの物事の秩序や法則を把握して、利益を得たり、リスクを回避したりするなど、自らの力で制御しようとするところは不思議現象信奉と共通している (板橋, 2004)。

4. 健康ブームの台頭

野村 (2003) によれば、現在の健康ブームは、1970年代から消費社会が開始されて人々の中に消費者としての自覚が定着してきたところへ、1991年にプロポリスなどの健康食品がヒット、同時に1990年代前半には薬害エイズ問題で健康に対する危機感が高まり、さらに1996年に生活習慣病キャンペーンが始まったことに遡るといえる。

特定の食品や健康法がもてはやされる健康ブームは、科学信仰を包含する形で新たに構築された、不思議現象信奉のバリエーションといえるのではないだろうか。大衆の中には、ものごとがもっと単純で自然であった時代への郷愁と、科学に対する畏怖とが共存しており、人々はより伝統的で

ナチュラルな療法と科学とが融合することを望んでいる (Park, 2000)。すなわち、健康ブームは、従来の超能力や心霊現象といった形態をとっていないものの、“科学性”を持ち合わせた“不思議現象”として、オウム・ショックを受けた日本人の“無宗教の宗教性”を充足させる格好の題材であったと考えられる。竹下 (1999) も、伝統宗教への帰依が希薄になった昨今の日本では、特定宗教の枠組みに束縛されない、手軽で、一見すると安全な“健康カルト”に依存する危険性が高いと指摘している。

このような現代の健康には、DNA や“血中コレステロール値”といった、人間の解釈や主観を超えた外的基準に基づいて正誤が規定されており、人為を超えた超越的な力に依存して問題の解決にあたらうとするところ (北澤, 2003) や、健康法の実践によって多くのトラブルを抱えた身体を改善することを通じて、自分自身のアイデンティティをも再生しようとするところ (野村, 2003) に特徴がある。これらの心理的メカニズムは、占い・呪術などを嗜好し、人為を超えた超越的な力に依存しながら、自己肯定を追及する不思議現象信奉と共通している (小城・坂田・川上, 2006) と同時に、“中性脂肪濃度”や“尿酸値”といった、一見科学的な表現を用いて提示される健康法に対して盲目的に服従するなど、科学信仰の傾向も強い (野村, 2003)。

健康ブームを牽引したメディアには、「午後は〇〇おもいきりテレビ」(日本テレビ系列, 1987年10月～)、「ためしてガッテン」(NHK, 1995年4月～)、「はなまるマーケット」(TBS系列, 1996年9月～)、「発掘! あるある大事典」(フジテレビ系列, 1996年10月～2007年1月)、「スパスパ人間学」(TBS系列, 1999年10月～2005年3月)、「ぴーかんパディ!」(TBS系列, 2006年4月～8月) などがある。これらの番組で紹介された特定商品は、需要が殺到し、店頭からなくなる事態も発生している (柄本, 2003)。しかし、その背景には、多くの問題をはらんでいたことが露呈された。「発掘! あるある大事典2」(2007年1月7日放送) では、納豆のダイエット効果に関するデータの捏造が発覚し、遡って過去の放送分についても捏造があった

ことが明らかとなっている（朝日新聞，2007年1月21日；朝日新聞，2007年3月1日）。メディアによって扇動された一連の健康ブームが、「発掘！あるある大事典2」の捏造問題によって一気に終息へと向かうのか、または一部をリニューアルする形で維持され続けるのかは定かではない。いずれにせよ、根拠のない情報に翻弄された視聴者の心理には、“自然に”かつ“科学的に”自己を存続させ、身体や生命をコントロールしたい欲求が潜在していると推測される。

研究目的

近年の日本における不思議現象ブームは、1973年に始まり、1995年のオウム事件を転換期としている。ブームを実証するのは困難であるが、雑誌記事数の推移から、世相や流行現象を分析する手法も多く採り入れられている（たとえば上瀬・亀山，1994；上瀬，1994など）。本研究では、近年の不思議現象のブームを雑誌記事によって追跡し、推移とその背景を考察することを目的とする。

方法

調査対象：大宅壮一文庫の雑誌記事検索データベースに収録されている1988年1月～2007年3月の雑誌記事を対象とする。

調査方法：第1に、大宅壮一文庫の記事分類カテゴリに従って関連する記事を検索した。分類カテゴリはTable1に示す。第1に、“宗教・思想”の大項目から“オカルト・心霊術”および“易占”の中項目を、“科学”の大項目から“宇宙開発・人工衛星”，“宇宙，自然”，“人間について”，“生物”，“民間療法・健康法”の中項目を選択し、それぞれの小項目の記事数を検索した。小項目に関しては、不思議現象と関連の深い内容で、全体の記事数が数十～数百件以上のものを分析対象とし、記事数が少

Table1. 分類カテゴリー一覧

宗教・思想		科学				
オカルト・心霊術	易占	宇宙開発・人工衛星	宇宙・自然	病院・医者・手術	人間について	生物
心霊術 現代の怪談・七不思議 幽霊・幽霊写真 妖怪 死後の世界 催眠術 超能力少年 魔女	易術一般 風水・風水師 姓名判断 運・ツキ 陰陽・陰陽師 四柱推命 数秘術・占霊数 占星術 予言・予測 人相・手相 血液型占い		宇宙人・UFO 宇宙人 空飛ぶ円盤・UFO エイリアン・アブダクション	内臓移植・人工臓器	心理一般 心理療法 バイオテクノロジー クローン・クローン人間/動物	雪男・野人 ネッシー

ないものは分析の対象から除外した。

第2に、上記の分類では測定できない指標として、木村(1996)、小城ほか(2007)、堀江(2007)を参考に、“スピリチュアル／スピリチュアリティ／スピリチュアリズム”(以後“スピリチュアリティ”とする)、“癒し”、“超能力”、“手品・奇術・マジック”(以後“手品”とする)、“霊視”、“チャネラー・チャネリング”、“ツチノコ”、“人面魚”のキーワードを用いて、フリー検索を行った。

第3に、不思議現象に関わる人物の記事検索を行った。まず、大宅壮一文庫の職業ジャンル分類に基づき、“宗教・心霊術”の記事検索を行い、その結果、記事件数の多かった“池田大作”、“麻原彰晃”、“細木数子”、“江原啓之”、“Dr.コバ”、“福永法源”、“宜保愛子”、“高塚光”、“鏡リュウジ”、“ダライ・ラマ14世”、“Mr.マリック”、“大川隆法”、“清田益章”、“藤田小女姫”、“安倍晴明”、“織田無道”、“マザー・テレサ”、“中森じゅあん”、“サイババ”、“文鮮明”、“ユリ・ゲラー”、“栗原すみ子”、“秋山真人”の23名について人名検索を行った。

また、参考として、日本における不思議現象ブームに多大な影響を与えた(小城ほか, 2007; 堀江, 2007)オウム真理教事件について、“宗教・思想”(大項目)／“新興宗教”(中項目)から、“オウム真理教”の小項目を選択し、記事件数を調査した。

なお、2007年は1～3月の3か月間の記事件数を4倍したものを推定値として併せて記載した。

結果と考察

まず、オウム真理教事件の記事件数推移をFigure1に示す。1995年3月20日の地下鉄サリン事件を契機として、一連の事件が明るみに出たことから、1995年に突出して記事件数が多く、以降は急速に減少する。したがって、オウム真理教事件に影響を受けた不思議現象ブームは、1995～

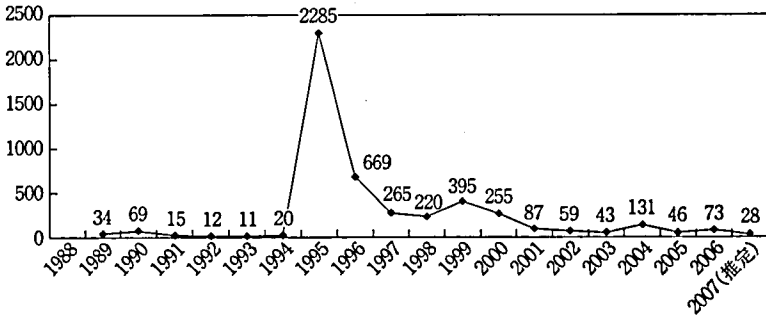


Figure1. オウム真理教の記事件数推移

1996年を転換期としていられる。

また、1999年に再び記事件数が増加していることも注目される。その理由として週刊ポストや週刊読売で、佐木隆三・江川紹子などが連載を持っていたことも挙げられるが、1999年は世紀末であり⁵⁾、オウム真理教教団の終末思想や、ノストラダムスの大予言などと関連して件数が増加したと推察される。堀江(2007)も、1999年～2000年ごろ、霊性はスピリチュアリティへと衣替えし、癒しやカウンセリングのブームに乗って、オウム事件によって抑圧された霊信仰が、再び顕在化してきたと指摘している。すなわち、不思議現象ブームを考える上で、オウム事件のあった1995年と共に、オウム・ショックが緩和され、あるいは終末思想と関連した1999年が目すべきターニング・ポイントであると考えられる。

ジャンル別分析

記事件数を不思議現象のジャンル別にまとめ、主要な事象をグラフに示した。全体の記事件数総数から、日本においてブームとなった不思議現象は、“オカルト・心霊術”、“易占”であると考えられる。

オカルト・心霊術

“オカルト・心霊術”の記事件数推移を Table2 および Figure2-1 に、

Table2. オカルト・心霊術の記事件数

	宗教・思想										キーワード					
	オカルト・心霊術										超能力	マジック	手品・奇術	スピリチュアリティ	霊視	チャネリング
	全体	心霊術	現代の怪談	幽霊・幽霊写真	妖怪	死後の世界	催眠術	超能力少年	魔女	魔術						
1988	88	25	20	34	2	4	2	2	1		48	65	5	2		
1989	125	27	31	31	18	13	1	0	4		71	127	1	1		
1990	180	68	80	20	1	5	0	4	2		87	125	2	1		18
1991	221	92	57	37	2	28	2	1	3		74	72	9	4		31
1992	126	50	21	31	4	9	3	6	2		59	100	6	34		10
1993	146	66	32	24	10	7	5	1	2		58	112	21	25		2
1994	150	57	29	28	9	16	7	4	0		194	84	19	25		10
1995	133	56	35	16	11	9	2	4	0		84	103	24	15		2
1996	132	44	35	13	15	20	1	3	2		72	124	38	6		4
1997	97	36	29	7	18	3	2	2	1		41	113	26	2		3
1998	117	30	45	26	4	5	5	1	3		38	131	21	0		3
1999	112	19	46	31	3	1	9	1	2		28	163	6	1		6
2000	106	12	37	43	10	2	4	0	0		27	125	18	5		3
2001	183	38	64	59	8	6	7	1	2		54	152	26	2		0
2002	180	33	57	68	10	4	6	0	2		35	166	42	3		3
2003	193	45	59	65	7	3	8	1	7		47	230	61	11		3
2004	187	39	70	64	6	3	7	0	1		32	228	61	4		2
2005	205	63	60	63	13	2	5	0	0		67	304	62	5		3
2006	320	117	115	66	9	7	4	1	3		55	236	222	7		6
2007	57	30	19	4	1	1	2	0	0		11	49	64	2		1
(推定)	228	120	76	16	4	4	8	0	0		44	196	256	8		4
計	3058	947	941	730	161	148	82	31	36		1182	2809	734	153		113

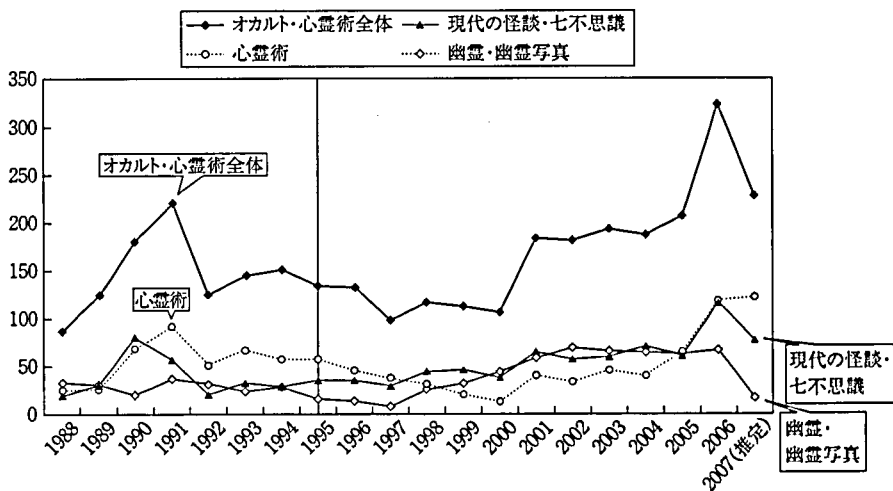


Figure2-1. オカルト・心霊術の記事件数推移

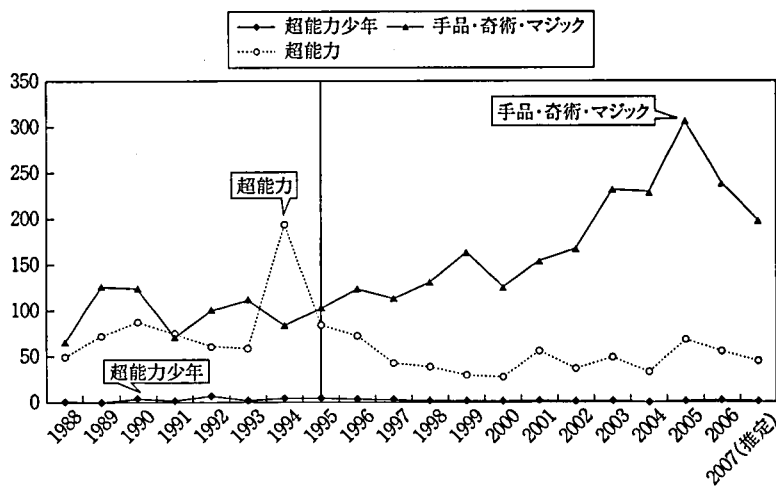


Figure2-2. 超能力・手品の記事件数推移

“超能力”，“超能力少年”，“手品・奇術・マジック”のみの記事件数推移を Figure2-2 に，心理に関する記事件数を Table3 と Figure2-3 に示す。

“オカルト・心霊術”全体の記事件数は，1991年に最初のピークがあるが，1995年を境に緩やかに減少，2001年に再び増加し，2006年には急増している。内訳を見ると，“現代の怪談・七不思議”，“幽霊・幽霊写真”が比較的增加が緩やかであるのに対して，“心霊術”は，1990年代前半は記事件数が多く，1997年から2000年にかけての減少傾向が強いこと，すなわち，1990年代前半と後半とで，記事件数に顕著な差があることが見て取れる。また，2006年には再び“現代の怪談・七不思議”，“幽霊・幽霊写真”に追いつき，2007年（推定値）では追い越していることも注目される。このことから，近年，心霊に対する人々の関心が高まってきたことが推察される。

Table3. 心理に関する記事件数

	科学		キーワード
	人間について		
	心理一般	心理療法	癒し
1988	90	15	5
1989	71	21	6
1990	83	28	6
1991	112	20	5
1992	177	31	24
1993	124	19	24
1994	108	58	27
1995	140	56	93
1996	151	69	169
1997	193	85	109
1998	281	91	139
1999	226	98	255
2000	184	37	383
2001	213	77	474
2002	248	83	520
2003	236	91	559
2004	253	88	472
2005	263	109	340
2006	271	131	454
2007	48	38	73
(推定)	192	152	292
計	3472	1245	4137

Figure2-2において，“オカルト・心霊術”の中でも，“超能力”と“手品”の記事件数推移を示したことは，超能力ブームは，手品ブームに取っ

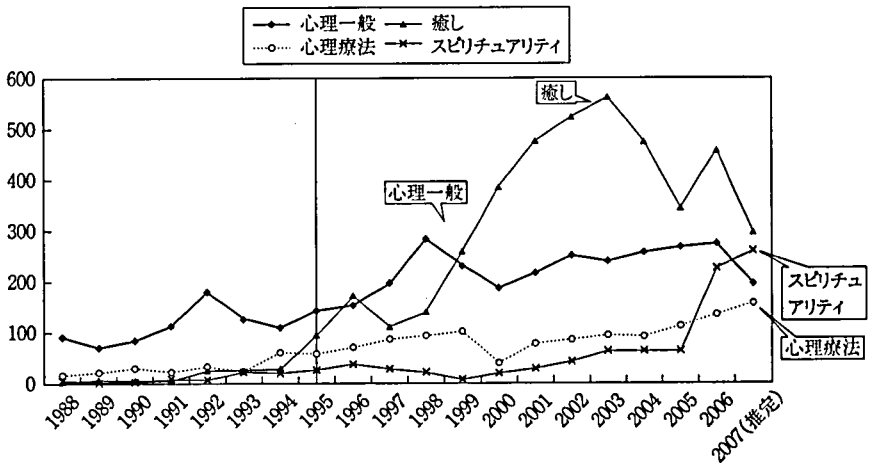


Figure2-3. 心理に関する記事件数推移

て代わられたという小城ほか (2007) の指摘と整合的である。1994年に“超能力”が脚光を浴びた直後⁶⁾、1995年を境に両者の記事件数は逆転、2005年のピークに向かって“手品”は増加していくのに対して、“超能力”は減少傾向にあることが明確である。しかしながら、2007年の推定値では、“手品”も減少しており、手品ブームも終焉に近づいていると見ることもできる。

次に、“オカルト・心靈術”と密接に関連のある、心理に関する記事件数の推移を Figure2-3 に示す。いずれの記事件数も、1995年から増加傾向にあることは共通しており、人々の関心が自己や内面に向かってきたことを示唆している。特徴的なのは、1999年から“癒し”が急増、2003年までにほぼ2倍となっているのに対して、“スピリチュアリティ”は、2000年からじわじわと増加し始め、2007年には、ピークを過ぎて減少傾向に入った“癒し”とほぼ並んでいることである。すなわち、傷つき、疲れた自己へのいたわりの象徴としての“癒し”のブームは終わり、より超越的な靈性と結びついて、現世を超えたところに自己存在の根源を求める“スピリチュアリティ”のブームへ突入したことが推察される。

易 占

“易占”の記事件数推移を Table4 および Figure3 に示す。“易占一般”は、1995 年から 2000 年のピークに向かって増加、以後 2003 年まで一旦減少するものの、2004 年に再び増加している。おおよそ同じ傾向をたどっているのは、“風水”と“占星術”である。一方、“予言・予測”は 1999 年にピークを迎えた後に減少、以後は少ないが、これは、1999 年の世紀末にノストラダムスの大予言の関連で記事件数が多かったものと推察される。“陰陽・陰陽師”は、夢枕獏の原作による作品が 1993 年から 2005 年までコミック誌で連載され、2001 年に映画化、2002 年にドラマ化されたため、2000～2002 年にかけてブームとなったのだと考えられる。

科学・宇宙

“宇宙開発・人工衛星”と、“宇宙人・UFO”の記事件数の推移を Table5 および Figure4-1 に、“宇宙人・UFO”とその他科学事象の記事件数の推移を Figure4-2 に示す。“宇宙人・UFO”全体は、1997 年に最初のピークがあり、一旦減少した後、2000 年から緩やかに増加傾向にある。内訳は、“UFO”の方が全体の件数がやや多く、特に 1980 年代後半と 2000 年代前半において“宇宙人”よりも多い傾向が見られるものの、顕著な差ではなく、ほぼ類似した傾向といえるだろう。1997 年に記事件数が多い理由として、アメリカの火星探査機マーズ・パスファインダーが打ち上げられたこと、1947 年のロズウェル事件に関して政府が調査結果を公表したことが挙げられる。2006 年から 2007 年（推定値）にかけてやや増加傾向にあるが、これは、ロズウェル事件を再び検証する特集が組まれているためである。

“宇宙開発・人工衛星”については、1989 年、1994 年、1998 年、2003 年、2005 年と、いくつか山があるが、いずれもアメリカ、旧ソ連、日本、欧州宇宙機関などが惑星探査を行うなど、積極的に宇宙開発が行われた時

Table4. 易占の記事件数

		宗教・思想														
		易占														
全体	全体	風水	風水師	姓名判断	易術一般 運・ツキ	陰陽・陰陽師	四柱推命	数秘術	占靈数	占星術	予言	予測	人相	手相	血液型	占い
1988	109	46	0	4		5	1			33	7	17			8	
1989	145	71	1	4		1	0	1		31	24	14			6	
1990	241	119	2	8	3	3	6	1		41	49	21			12	
1991	237	102	1	7	3	1	14	0		39	61	15			22	
1992	233	102	1	11	4	1	8	1		51	46	27			10	
1993	187	87	7	8	4	2	6	1		34	34	28			4	
1994	194	86	22	4	3	1	3	2		42	36	23			9	
1995	281	130	41	13	11	0	4	3		62	41	31			18	
1996	428	146	70	6	5	1	3	3		94	50	77			65	
1997	375	169	81	2	8	2	2	4		62	64	57			29	
1998	403	183	87	5	12	1	2	7		74	117	16			16	
1999	606	299	157	6	17	2	9	9		93	165	34			20	
2000	448	311	45	7	7	40	4	6		70	37	21			14	
2001	383	253	41	9	10	34	3	4		62	29	29			18	
2002	363	227	45	10	10	10	2	10		78	23	24			20	
2003	385	227	69	10	6	7	6	5		99	28	12			24	
2004	502	280	86	21	8	4	8	7		120	36	30			45	
2005	507	293	96	13	12	2	5	3		132	24	18			48	
2006	465	255	74	6	20	6	5	4		143	27	23			30	
2007	126	71	38	1	1	0	2	1		37	13	5			2	
(推定)	504	284	152	4	4	0	8	4		148	52	20			8	
計	6618	3457	964	155	144	123	93	72		1397	911	522			420	

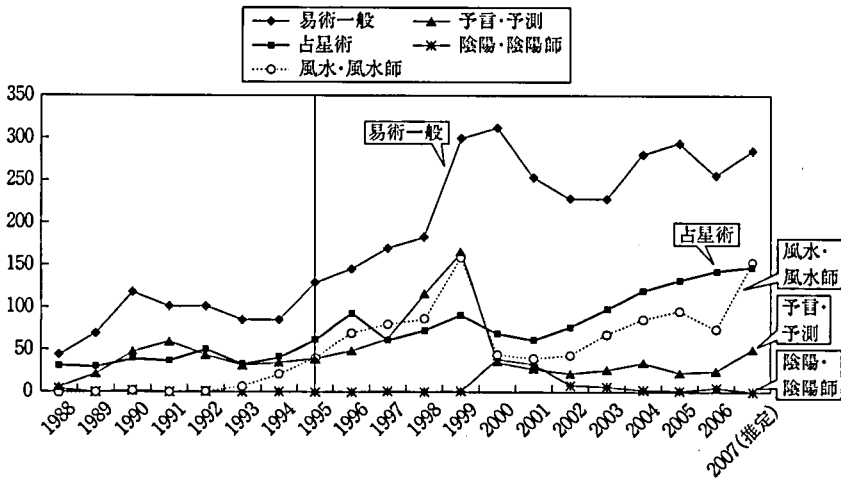


Figure 3. 易占の記事件数推移

期である。特に、1997年に打ち上げられたマーズ・パスファインダーの記事が1998年にも引き続き掲載され、件数自体は1998年の方が多い。

しかし、“宇宙開発・人工衛星”と“宇宙人・UFO”は、記事件数の上で直接的に明確な関連性は読み取れない。1997年、アメリカの火星探査機マーズ・パスファインダーは火星に着陸、ソジャーナと名づけられたローバー（自走ロボット）が岩石などを採取して、生命体存在の可能性も期待されたため（朝日新聞、1997），“宇宙人・UFO”の記事件数も影響を受けているが、採取された成分は、いわゆる“火星”の存在を示すものではないことが判明したことが関心を低下させたのか、マーズ・パスファインダーの記事件数が多くなる翌1998年には“宇宙人・UFO”の記事件数は減少している。“宇宙人・UFO”は、言説の中にのみ存在が可能で、映像や情報処理技術によって明確に解析が行われると同時に存在が消滅する（木原、2005）ことから、“宇宙開発・人工衛星”とはまったく別次元で存在している可能性が示唆されよう。

また、“宇宙人”、“UFO”、“エイリアン・アブダクション”の目撃談は、“バイオテクノロジー”、“クローン”などの科学技術の発展が背景にある

Table5. 科学・宇宙の記事件数

	科学									
	宇宙開 発・人 工衛星		宇宙・自然			人間について		病院・医者・手術 内臓移植・人工 臓器		
	全体	宇宙人 空飛ぶ円盤	UFO	エイリアン・アブダクション	宇宙人・UFO	バイオテクノロジー	全体	クローン		
1988	155	25	9	18	2		34	1		75
1989	173	22	6	21	0		44	0		58
1990	107	30	7	23	0		31	2		163
1991	114	27	14	13	0		31	2		87
1992	97	28	7	19	0		23	0		76
1993	73	13	7	6	1		19	3		49
1994	123	18	6	9	0		36	4		68
1995	79	21	11	13	3		27	0		40
1996	83	37	9	13	0		26	0		24
1997	100	51	24	14	0		94	59		106
1998	147	23	10	17	1		94	57		54
1999	132	23	12	12	0		87	24		199
2000	108	17	13	9	5		136	21		52
2001	102	25	11	14	0		181	43		88
2002	101	41	12	34	1		113	37		52
2003	162	40	18	23	3		124	50		45
2004	129	34	11	24	1		74	17		43
2005	173	33	15	17	3		52	11		48
2006	114	48	20	31	0		53	7		84
2007	34	14	7	7	0		12	0		20
(推定)	136	56	28	28	0		48	0		80
計	2442	626	257	365	20		1339	338		1511

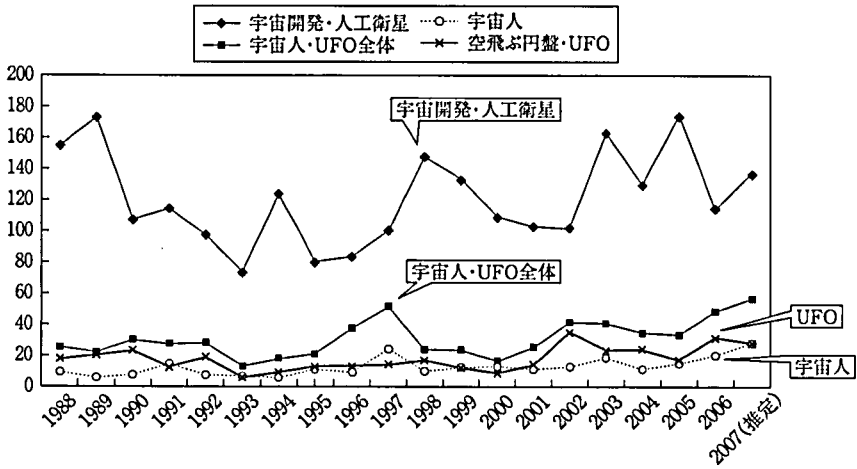


Figure4-1. 宇宙開発と宇宙人・UFOの記事件数推移

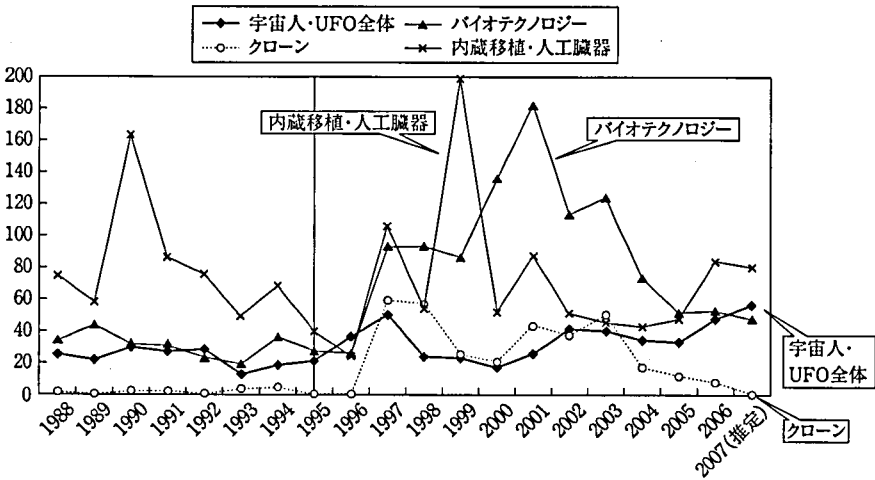


Figure4-2. 宇宙人・UFOと科学の記事件数推移

と指摘されているが(木原, 2005), これに関しても, 記事事件数の推移からは明確な関連性が読み取れない(Figure4-2). 日本においては, “オカルト・心霊術”, “易占” に比べて “宇宙人・UFO” の記事事件数が少なく, また, 掲載されている雑誌も “週刊プレイボーイ” や “ムー” など特定のものにほぼ限定されており, 不思議現象ブームの主流ではないことが指摘される.

UMA (Unidentified Mysterious Animal=未確認動物)

UMA (Unidentified Mysterious Animal=未確認動物) に関する記事事件数を Table6 に示す. 全体の記事事件数が少なく, 他の不思議現象と比べて, 突出した傾向を見出すのは困難である. 強いていうなら, “ツチノコ” で 2001 年に, “人面魚” で 1990 年に記事が比較的多いというところであろうか. いずれも, 軽いブームであったが, 社会現象となるまでの大きなムーブメントではなかったといえよう.

健康ブーム

健康に関する記事事件数推移を Table7 および Figure5-1~5-3 に示す. “健康法” 全体を見てみると, 1998 年ごろまではいずれもほぼ横ばいで件数にも大きな差は見られないが, 1997 年ごろから “食品による健康法” が, 1999 年ごろから 「民間療法・漢方医薬」 が急速に増加し始め, それを追うように “運動による健康法”, “健康法一般” も増加していることが見て取れる. なお, “ハリ・灸・指圧” は, 2002 年から 2005 年をピークに急速に減少し, 2003 年を境に “運動による健康法” と逆転した (Figure 5-1).

“健康法一般” は, 2000 年ごろまではほぼ横ばいであるが, 2000 年から 2006 年のピークまで増加の一途をたどる. 内訳を見てみると, “ヨガ” が 2003 年から, “岩盤浴”, “ゲルマニウム温浴”, “酵素風呂”, “砂風呂”, “腸洗浄”, “デトックス”, “ラドン温泉器” を合計した “デトックス関連”

Table6. UMA の記事件数

	科学		キーワード	
	生物			
	雪男・野人	ネッシー	ツチノコ	人面魚
1988	3		6	
1989	1		5	
1990	4		4	33
1991	2		4	7
1992	1		7	1
1993	2		2	1
1994	1	8	1	6
1995	1	0	1	1
1996	1	1	4	0
1997	3	0	1	1
1998	3	1	0	1
1999	1	2	1	2
2000	2	1	8	2
2001	3	2	14	1
2002	3	1	9	2
2003	3	2	4	0
2004	7	0	8	1
2005	3	2	8	2
2006	6	1	6	1
2007	0	0	1	0
(推定)	0	0	4	0
計	50	21	94	62

Table7. 健康法に関する記事件数

	科学											
	民間療法・健康法											
	民間療法・漢方医薬		健康法一般			食品による健康法			ハリ・灸・指圧		運動による健康法	
全体	デトックス関連	気・気功	ヨガ	全体	栄養補助食品・サプリメント	全体	ハリ・灸・指圧	運動による健康法	全体	栄養補助食品・サプリメント	ハリ・灸・指圧	運動による健康法
1988	93	46	1	11	7	100	44	52				
1989	75	82	0	30	14	113	28	54				
1990	111	87	0	33	7	134	35	42		2		
1991	86	110	0	22	9	124	43	43		3		
1992	120	102	0	34	13	99	42	59		2		
1993	91	80	0	36	12	91	43	36		4		
1994	135	107	0	33	16	217	50	34		3		
1995	130	80	0	28	10	121	60	20		11		
1996	155	72	0	14	4	121	72	48		13		
1997	65	80	4	28	2	131	73	33		18		
1998	104	94	10	10	3	168	107	49		31		
1999	179	86	8	7	10	226	105	59		62		
2000	183	75	8	9	1	244	108	60		51		
2001	245	125	8	17	5	333	113	83		84		
2002	260	158	13	12	13	457	151	100		140		
2003	263	192	15	17	39	519	133	151		147		
2004	302	211	16	26	98	500	127	229		166		
2005	269	254	119	10	159	503	133	225		201		
2006	217	361	182	21	148	428	0	272		125		
2007	31	51	21	4	30	87	0	53		24		
(推定)	124	204	84	16	120	348	0	212		96		
計	3114	2453	405	402	600	4716	1467	1702		1087		

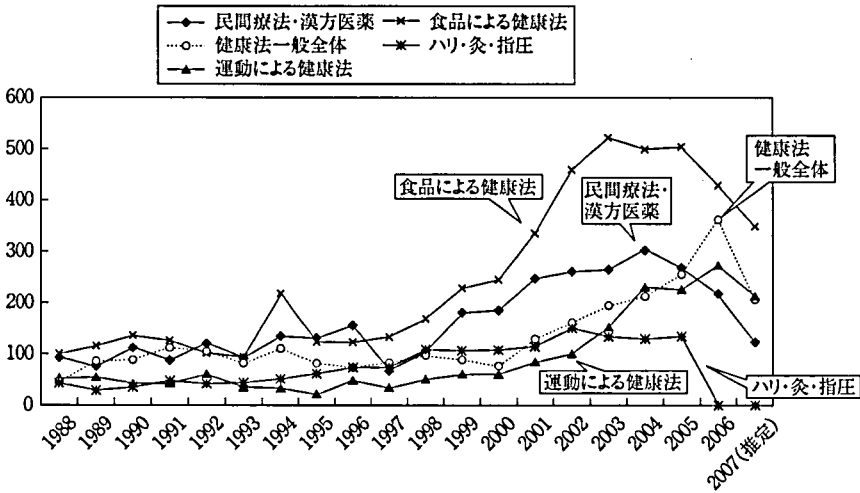


Figure5-1. 健康法の記事件数推移

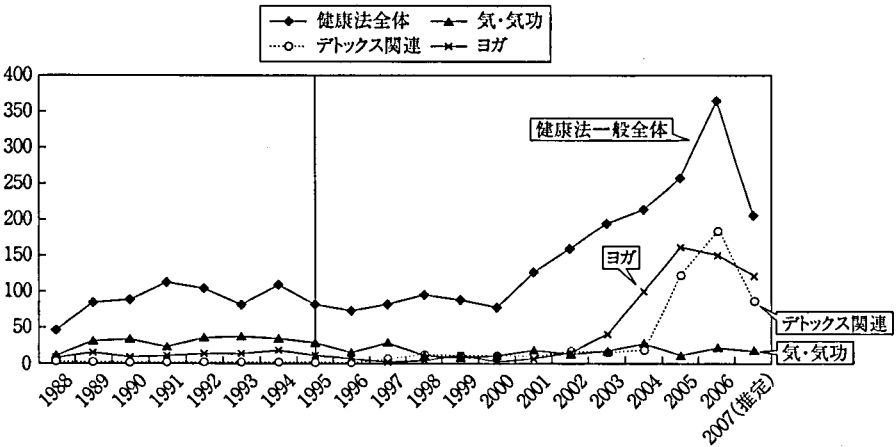


Figure5-2. 健康法一般の記事件数推移

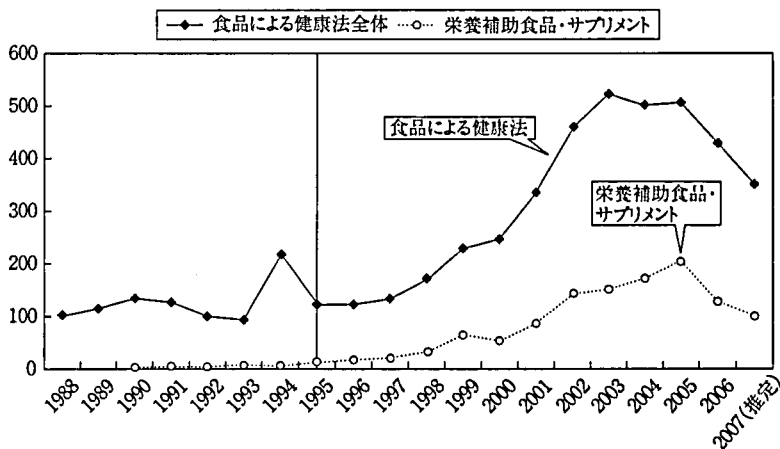


Figure5-3. 食品による健康法記事事件数推移

が2004年から急速に増加していることが読み取れる。“気・気功”は、ほとんど横ばいのまま推移している (Figure5-2)。

また、“食品による健康法”は、1998年ごろからじわじわと増加し始め、2003年から2005年にかけてピークを迎える。その中でも、“栄養補助食品・サプリメント”が類似した軌跡を描いて増加しており、食品による健康ブームは、主に栄養補助食品やサプリメントが担っていることがわかる (Figure5-3)。

総括すると、1997年ごろから健康ブームが到来し、“栄養補助食品・サプリメント”を主軸とする“食品による健康法”や“民間療法・漢方医薬”が健康ブームの主流であり、追うようにして、2002年ごろから“ヨガ”や“デトックス関連”を主軸とする“健康法一般”、“運動による健康法”がブームを押し上げたと考えられる。前者が、食品や医薬品など、体外から摂取するものであるのに対して、後者は体外への排出や、自発的な動作であることが注目される。なお、いずれの健康法も、2006年から2007年にかけて減少傾向にある。2007年は推定値であるため、推測の域を出ないが、一連の健康ブームを牽引してきた関西テレビ“あるある大事

典”が、番組内で捏造を行っていたことが2007年1月21日に発覚し、類似の健康情報番組も内容の見直しを迫られたことから、健康ブームも終焉に向かいつつあるのかもしれない。

人 物

“宗教・心霊術に関わる人物”の記事件数を Table8 および Figure6-1 に、人物別の記事件数推移を Figure6-2～6-4 に示す。人物別記事件数推移は、人数が多いため、記事件数の多いものから3分割してグラフを作成した。

“宗教・心霊術に関わる人物”の記事件数は、1988年からおおよそ増加傾向にあったが、1995年を境に急減し、1997年には全体の最低件数となっている。しかし、1999年から緩やかに増加し、2006年には最高件数となっており、宗教・心霊が再びブームとなっていることを示唆している (Figure6-1)。

人物別に記事件数推移を見てみると (Figure6-2)、もっとも件数の多かった“池田大作” (創価学会) は、多少の起伏はあるものの、おおよそ記事件数が一定しているのに対して、“麻原彰晃” (オウム真理教) は1995年に突出して件数が多い。また、“細木数子” (占い師) は1980年代初頭に登場しているが、悪徳商法で訴えられて一旦退場したが (小城ほか, 2007)、オウム・ショックの後、1999年から再登場して、2000年代の不思議現象ブームを牽引しており、“スピリチュアル・カウンセラー”を名乗る“江原啓之”がそれに続く形となっている。“Dr. コバ” (風水師) は、相対的に件数が少ないために起伏が目立たないが、1999年に“細木数子”と共に増加、その後、低空飛行を続けている。オウム・ショック後の不思議現象を風水が担っていることと考え合わせると (Figure3)、“Dr. コバ”が1999年のターニング・ポイントまで不思議現象を維持しながら、スピリチュアル・ブームの“江原啓之”へと引き継いだと考えられる。

次いで、Figure6-3では、“宜保愛子”が1990年代前半の心霊現象ブー

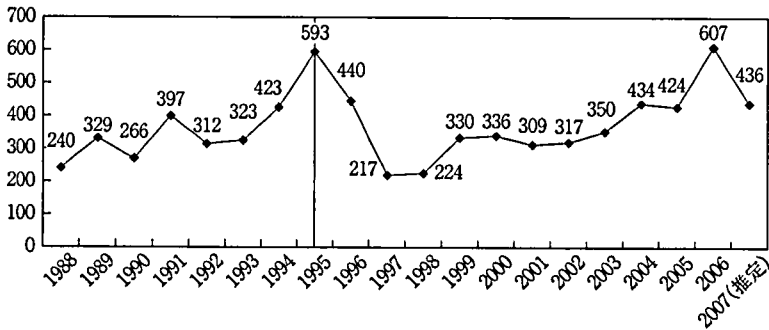


Figure6-1. 宗教・心霊術に関わる人物

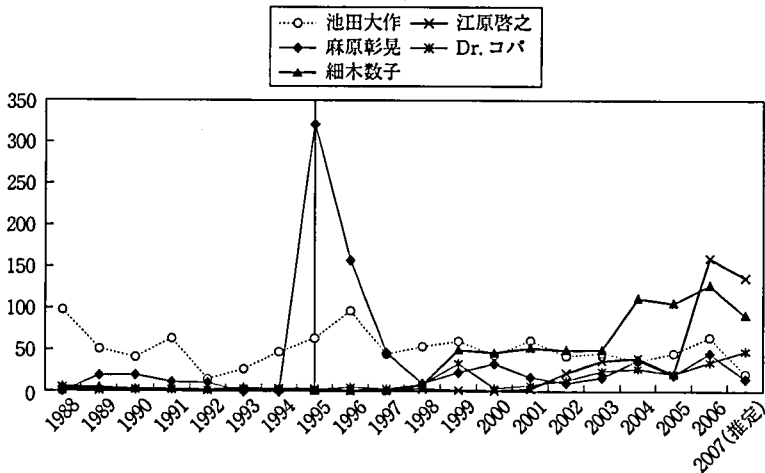


Figure6-2. 人物別記事数推移 1

ムを牽引しており、1995年を境に姿を消している。1999年に再浮上するものの、2003年に病死したため、以降は回顧記事のみとなっている。“福永法源”（法の華）は、1996年と2000年に大きな山があるが、記事内容を見ると、1996年は“福永法源”自身が“週刊宝石”と“女性自身”で連載を持っていたため、2000年は詐欺罪で逮捕されたためであると推察される。

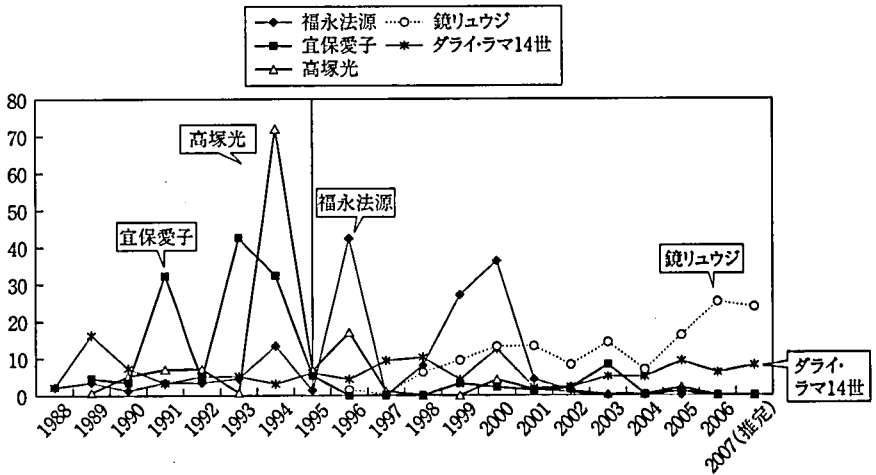


Figure6-3. 人物別記事事件数推移 2

“高塚光”（超能力者）は、1994年に集中的に取り上げられたことが見て取れる。“鏡リュウジ”（占星術研究者）は、1998年ごろから登場、緩やかに増加しており、“細木数子”・“江原啓之”ら（Figure6-2）と類似した軌跡を描いていることから、共に2000年代の不思議現象ブームを牽引していると推察される。“グライ・ラマ14世”（ラマ教）は、大きな起伏はなく、一定した件数を保っており、世相やブームとはあまり関係がないと考えられる。

Figure6-4では、“大川隆法”（幸福の科学）が1991年に突出して多いが、1991年に“幸福の科学”が宗教法人化、積極的に広報活動を行ったことを反映していると見られる。“藤田小女姫”は1994年に殺害され、“織田無道”は2002年に宗教法人乗っ取りで告訴（2004年に有罪確定）されたため、それぞれ件数が多い。2003年に“清田益章”の記事件数が多いのは、本人が“ダ・ヴィンチ”という雑誌で連載を持っていたためである。2000年の“安倍晴明”は、陰陽師を扱った小説が2001年に映画化、2002年にドラマ化された陰陽師ブームの反映であろう（Figure3参照）。“Mr. マリック”は、1989年に注目され、1994年ごろまでは一定の件数を示している

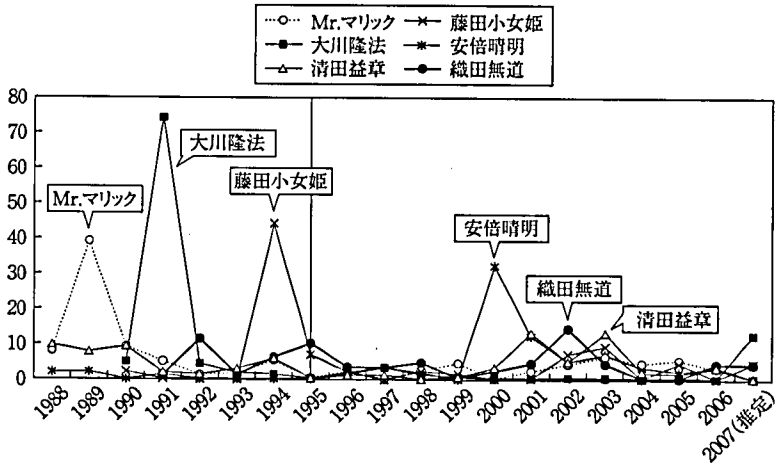


Figure6-4. 人物別記事事件数推移 3

が、1995年以降は低迷、1999年に再び増加し、2000年代には安定した件数を保っている。

総括すると、“池田大作”や“ダライ・ラマ14世”のように、突出した事件と絡んでいない場合は、記事件数はほぼ一定で、世相やブームとはあまり関連がないのに対して、“麻原彰晃”や“福永法源”，“藤田小女姫”，“織田無道”のように、事件を起こしたり、巻き込まれたりした場合には、その年に記事件数が集中的に多くなる傾向がある。1995年以前は、“宣保愛子”の霊視，“Mr.マリック”の超魔術，“高塚光”の超能力が不思議現象ブームを担っていたが、1995年に一斉に退場、オウム・ショック後は“風水”が中心となった不思議現象ブームを（Figure3）、細々ながら“Dr.コバ”が支え、1999年に“細木数子”が再浮上、以後、“江原啓之”，“鏡リュウジ”がブームを牽引していると考察される。

主要事象の相対的關係

これまで、ジャンル別に記事件数の推移を見てきたが、不思議現象の相対的な関係を見るために、主要事象の記事件数推移をFigure7に示す。

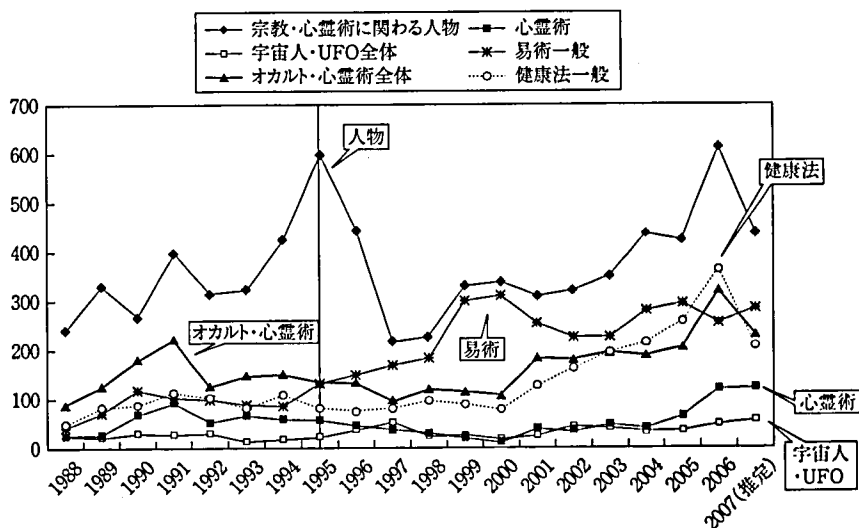


Figure7. 主要事象の記事件数推移

1990年代前半は、不思議現象ブームの中心は“オカルト・心霊術”といえよう。1995年のオウム・ショックによって破壊的カルトを連想させやすい“オカルト・心霊術”は減少し、再浮上する2000年ごろまでは、これに代わって“風水”や“占星術”を中心とする易占がブームを牽引していたと推察される。“風水”や“占星術”のアドバイスは、インテリアや小物など、生活に密着したコストの小さい消費が中心で(みお, 1998; 草野, 2000), また, “貴重品, カードの管理はしっかりと”など, ごく一般的な日常生活の範囲内の注意事項が多い(村上, 2005)ことから, オウム・ショックを受けた人々にとって, 抵抗感が薄く, 受け入れやすいものであったと考えられる。

“オカルト・心霊術”の再浮上には, “健康法”も類似した増加傾向を描いて併走していることが注目される。今回のデータからは, “オカルト・心霊術”ブームと, “健康法”ブームとの間の直接的な因果関係までは解明できないが, 人々の中に, 目には見えない, 超越的な力の働きを求め, 精神と身体の両面での自己再生を求める心理が錯綜していることを示唆し

ている。なお、“宗教・心霊術に関わる人物”、“オカルト・心霊術”、“健康法一般全体”は、2006年をピークとして、2007年は同じ軌跡を描いて減少している。2007年は推定値であるため、推測の域を出ないが、ブームの終焉を示唆しているとも考えられる。

一方、“宇宙人・UFO”は、相対的に件数が少なく、ロズウェル事件に関する政府の調査報告書公表といった動きのあるときに多少件数が増加するのみで、全体としてはあまり大きな変化はない。UFOや宇宙人の目撃談はアメリカが中心であり、日本ではブームといえるほどの大きな社会現象とはならなかったと推察される。

全体的考察

オウム・ショックは、それ以前の“オカルト・心霊術”のブームを沈静化させ、“内臓移植・人工臓器”、“バイオテクノロジー”といったキーワードに代表される科学性の台頭や健康ブーム、“手品”に代表されるエンターテインメント性の強調へとつながったと指摘される。一方で、オウム・ショックを経ても、なお人々の中に根強く残る霊信仰は、“風水”や“占星術”などの破壊的カルトを連想させない、日常生活に密着した“易占”へと向かった。

しかしながら、2000年前後には、科学やエンターテインメントのブームはやや翳りを見せている。2000年代前半～2006年をピークに減少傾向にあるのは、“宗教・心霊術に関わる人物”、“オカルト・心霊術”、“幽霊・幽霊写真”、“現代の怪談・七不思議”、“超能力”、“手品”、“健康”、“癒し”、“内臓移植”、“クローン”、“バイオテクノロジー”などであり、恐怖や驚愕をエンターテインメントとして楽しむブーム、または傷ついた自己を人工的・医学的にいたわり、再生させようとするブームが終焉しつつある可能性が考えられる。前述の“発掘！あるある大事典2”（2007年1月7日放送）の捏造問題は、翳りを見せ始めた科学・健康ブームの終息に拍車をかけたといえるのかもしれない。

一方、“心霊術”や“易占”が、“スピリチュアリズム”に衣替えて、新たなブームの兆しを見せている。2000年代前半から増加傾向にあるのは“易術（特に風水と占星術）”、“オカルト・心霊術”の下位項目の“心霊術”、“スピリチュアリティ”、“心理療法”などであり、不確かな自己や未来について、人為を越えたレベルで把握し、コントロールしたいという欲求が人々の間で高まりつつあると推察される。新たなブームは、スプーン曲げや透視、念写、空中浮遊といったエンターテインメント性を強調した超能力や、心霊写真、幽霊といった恐怖を煽る心霊現象ではなく、自身の人生や物事を自身にとって有益な方向へコントロールするための情報を入手しようとする“占い・呪術”（小城・川上・坂田，2006）の要素が強いこと、また、その情報は健康法や臓器移植・クローン技術のように、人為の範疇にあるものではなく、スピリチュアル・カウンセラーといった霊媒師を介するなどして、人為を超えた次元に帰属されていること、カウンセリングの要素も包含してポジティブなコンテキストに乗せられていること（小城ほか，2007）に特徴がある。

本研究の結果から、不思議現象のブームは時代と共にさまざまに移り変わってきたものの、オウム・ショックを受けても、なお、対象を替えながら、常に霊信仰を持ち続けてきたことが示唆され、この継続性の根底には日本人の無宗教の宗教性（堀江，2007）が存在していると考えられる。1995年から2000年にかけて盛んになった不思議現象信奉に関する一連の先行研究は、科学教育によって不思議現象に対するクリティカルな態度を形成することを推奨してきたが（小城・川上・坂田，2006）、人為を超えた、超越的な存在や力の働きを信じたい欲求が抑圧され得ないものであるのならば、それを前提とした上で、不思議現象信奉メカニズムと不思議現象に対する人々の“向き合い方”を解明していく必要があると考えられる。

注

- 1) 流行を示す用語は、服飾の流行を指すことが多い“ファッション (fashion)”、

永続的要素を指す“スタイル (Style)”, 狭義には短期間の服装の流行を指す“モード (mode)”, 熱狂状態で殺到する集合行動の一つを指す“クレイズ (craze)”, 伝播範囲が狭く持続性の短い小規模な流行を指す“フェッド (fad)”, 比較的持続性がある“ブーム (boom)” などがあるが, それぞれの境界線は明確ではない (中島, 1998). 本研究では, “比較的持続性があり, 個別の特殊性に起因するもので, 偶然, 幸運, 直感といった要素も含まれる” (中島, 1998, p. 40) ブームの用語を用いることとする.

- 2) アーノルドが目撃したのは, 当時は極秘計画であった連結気球であったと現在では考えられている. また, 彼は新聞社に対して“受け皿 (Saucer) を水面すれすれに投げたときにはずむ, いわゆる水切りとそっくりの飛び方をしていた”と述べているが, このときの“Saucer”が誤って物体の形状として引用され, 以後の“空飛ぶ円盤 (Flying Saucer)”へと変容した (木原, 2006).
- 3) このとき報告されたミュートレーションは, いずれも病気や怪我による通常の死で, その数も例年と変わらないことが後の調査で明らかになっている (木原, 2006).
- 4) ヘブンズ・ゲートは, 1975年, 大学教授のマーシャル・アップルホワイトによって創立され, インターネットを積極的に活用して活動を展開していた. 1997年3月, “ヘル・ホップ彗星とともに地球に接近する宇宙船に乗り込み, 天国に旅立つ”とのメッセージを残して, 39人の信者が集団自殺した (井上, 2001).
- 5) 厳密には, 20世紀の最終年は2000年であるが, 1999年が世紀末として語られることが多い.
- 6) 後述の高塚光 (超能力者) の記事件数が1994年に多いことを反映していると考えられる (Table6-3).

引用文献

- 朝日新聞 (1997). “火星に生命?” 決め手は分光器 米探査機, 軟着陸成功 1997年7月7日夕刊 5.
- 朝日新聞 (2007). “納豆で減量” 番組捏造 実験・発言など6カ所 フジ系・関西テレビが謝罪 2007年1月21日朝刊 1.
- 朝日新聞 (2007). “あるある” 捏造, 新たに3件 関西テレビが再報告書 2007年3月1日朝刊 38.
- Balch, R. W., & Taylor, D. (1977). Seeker and Saucers: The role of the cultic milieu in joining a UFO cult. *American Behavioral Scientist*, 20, 839-860.
- 柄本三代子 (2003). 現代社会の健康と科学 野村一夫・北澤一利・田中 聡・

- 高岡裕之・柄本三代子 健康ブームを読み解く 青弓社 pp.185-229.
- 布施泰和 (2005). 超能力者・霊能力者に学ぶ不思議な世界の歩き方 成甲書房
- 堀江宗正 (2006). メディアのなかの「スピリチュアル」江原啓之ブームとは何か 世界 759, 242-250.
- 堀江宗正 (2007). 日本のスピリチュアリティ言説の状況 日本トランスパーソナル心理学・精神医学会 (編) スピリチュアリティの心理学 せせらぎ出版 pp.35-54
- 池田清彦 (1996). 科学教の迷信 洋泉社
- 井上順孝 (2001). 図解雑学 宗教 ナツメ社
- 板橋作美 (2004). 占いの謎 いまも流行るそのわけ 文芸春秋
- 上瀬由美子 (1994). 血液型ブーム 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理サイエンス社 pp.167-185.
- 上瀬由美子・亀山尚子 (1994). 大相撲ブーム 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理 サイエンス社 pp.73-92.
- 川本 勝 (1981). 流行の社会心理 勁草書房
- 木原善彦 (2006). UFOとポストモダン 平凡社
- 菊池 聡・谷口高士・宮元博章 (1995). (編著) 不思議現象 なぜ信じるのか ころの科学入門 北大路書房
- 菊池 聡 (1998). 超常現象をなぜ信じるのか 思い込みを生む“体験”のあやうさ 講談社
- 北澤一利 (2003). 健康の誕生 野村一夫・北澤一利・田中 聡・高岡裕之・柄本三代子 健康ブームを読み解く 青弓社 pp.57-99.
- 木村哲人 (1996). テレビは真実を報道したか 三一書房
- 川浦康至 (1981). 風俗・文化 辻 正三 (編) 個人と社会の心理学 協同出版 pp.141-149.
- 小城英子・川上正浩・坂田浩之 (2006). 不思議現象に対する態度の探索的研究 聖心女子大学論叢, 107, 17-56.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2006). 不思議現象に対する態度 (6) 不思議現象に対する態度尺度の得点パターンによる回答者の分類 日本心理学会第70回大会発表論文集 135.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2007). 不思議現象とマス・コミュニケーション：レビューと問題提起 聖心女子大学論叢 108, 35-69.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (印刷中). 不思議現象とマス・コミュニケーション 日本社会心理学会第48回大会発表論文集.
- 栗原正和 (2005). 現代に蘇った「千里眼女性」宜保愛子 「平成の真贋論争」渦中の人物はある社会事件でテレビから消えた 日本「霊能者」列伝 別冊宝島

- 1199, 宝島社 pp. 16-19.
- 草野直樹 (2000). テレビのオカルト番組を調べる (1998. 10~2000. 3) *Journal of the Japan Skeptics*, 9, 45-53.
- みおなおみ (1998). テレビの「オカルト番組」を調べる *Journal of the Japan Skeptics*, 8, 58-61.
- 溝口 元 (1997). 血液型人間学事始め—古川竹二『科学朝日』(編) スキャンダルの科学史 pp. 61-72.
- 村上健治 (2001). マジック・不思議は楽し —古今東西マジック見聞録— 燃焼社
- 村上幸史 (2005). 占いの予言が「的中」するとき 社会心理学研究, 21, 33-146.
- 長山靖生 (2005). 千里眼事件 科学とオカルトの明治日本 平凡社
- 中島純一 (1998). メディアと流行の心理 金子書房
- 中村 功 (2001) 携帯電話の普及過程と社会的意味 川浦康至・松田美佐 (編) 携帯電話と社会生活 現代のエスプリ 405, 至文堂 pp. 46-57.
- 那由他一郎 (2005). 世界初の念写成功者 長尾郁子 「千鶴子」以上のフィーバーを起こし突然の病死という悲劇 日本「霊能者」列伝 別冊宝島 1199, 宝島社 pp. 44-45.
- 根元順吉 (1997). 千里眼事件 『科学朝日』(編) スキャンダルの科学史 pp. 25-37.
- 西田公昭 (1995). マインド・コントロールとは何か 紀伊国屋書店
- 西田公昭 (1998). 信じるころの科学 マインド・コントロールとビリーフ・システムの社会心理学 サイエンス社
- 信田さよ子 (2006). タイム・トリップの快感? 江原啓之と前世ブームが意味するもの 朝日新聞社 論座 2006年6月号, 240-247.
- 野村一夫 (2003). メディア仕掛けの「健康」 野村一夫・北澤一利・田中 聡・高岡裕之・柄本三代子 健康ブームを読み解く 青弓社 pp.13-56.
- Park, R. L., (2000). *VOODOO SCIENCE: The Road from Foolishness to Fraud* Sanford J. Greenburger Associated, Inc., New York. (栗木さつき (訳) (2001). わたしたちはなぜ科学にだまされるのか インチキ! ブドゥー・サイエンス 主婦の友社)
- 瀬戸一夫 (2004). 科学的思考とは何だろうか—ものつくりの視点から 筑摩書房
- 白石信子・井田美恵子 (2003). 浸透した『現代的なテレビの見方』放送研究と調査, 5月号, 26-55.
- 竹下節子 (1999). カルトか宗教か 文藝春秋

小城英子・坂田浩之・川上正浩

詫摩武俊・佐藤達哉 (1994). 血液型と性格 その史的展開と現在の問題点 現代のエスプリ 324 至文堂

上野行良 (1994). 流行の心理 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理 サイエンス社 pp.209-231.

横田由美子 (2006). あなたはいま、幸せですか 江原啓之に魅せられた女たち 朝日新聞社 論座 2006年2月号, 230-237.

吉田司雄 (2004). 回帰する恐怖—『リング』あるいは心霊映像の増殖 一柳廣孝 (編著) 心霊写真は語る 青弓社 pp.153-187.